

主体的・対話的で深い学びの授業構想 (科目「簿記」)

1 対象生徒

普通科2年次の就職希望者を対象とした実務コースの生徒を対象とする(2年次より商業科目を履修)。数学や国語を苦手としている生徒が多く見受けられ、商業科目に対する意欲は高くない。

2 単元

第3編 決算(その1)

3 単元目標

- (1) 決算整理の意味とその必要性について理解させる。
- (2) 商品に関する勘定の決算整理、貸倒れの見積もり、固定資産の減価償却について、それぞれの意味を明らかにし、それに伴う計算方法及び記帳方法に習熟させる。
- (3) 棚卸表の意味や記入する内容について理解させる。

4 本時の目標

商品に関する勘定の決算整理仕訳の意味が理解できる。

※商品の記帳方法については、第2編「商品売買の取引」で分記法は学習済み。現在は3分法を学習している。

5 授業展開構想

課題の提示	
<p>商品売買業を営んでいる田原商店は、同業の福江商店から相談を受けた。 「我が社(福江商店)では、従来から分記法で記帳している。分記法は商品売買益をそのつど把握できるが、どれだけ売り上げたのか(売価)、その収益を上げるためにどれだけの商品(原価)を販売したのかが、損益計算書・貸借対照表では一目で分からない。」とのことであった。そのため田原商店は、3分法で記帳してはどうかと提案した。</p>	
課題1	売上原価とは何か調べてみよう。
課題2	当期の売買取引から、売上原価を計算してみよう。
課題3	当期に購入した商品(仕入高)を売上原価にするためには、どのような処理が必要か考えてみよう。

思考のための資料と想定される生徒の活動		
【ワークシート】プリント1 ・分記法と3分法の違い(仕訳)	【ワークシート】プリント2 ・売上原価とは	【ワークシート】プリント3 ・分記法と3分法の違い(決算)
・既習の分記法と学習中の3分法による仕訳を行い、T字形に転記する。	・3分法において、売上原価を算定するための仕訳を考える。	・分記法の場合と3分法の場合の損益計算書の違いを見つける。

対話と思考(対話を通じた課題解決のプロセス)
<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに転記された勘定の記録から売上原価を求める。(20分) ・購入した商品を資産として処理した場合と、費用として処理した場合の処理の違いを確認する。(5分) ※留意事項として費用収益対応の原則を教える。 ・分記法では必要のない売上原価の計算をなぜ3分法では行う必要があるのかを考える。(5分) ・損益計算書に記入される金額(売上勘定、仕入勘定)は当期分の収益と費用の総額でなければならないことを理解する。(10分) ・3分法における決算整理仕訳の意味を考える。(10分)

学習の成果
<ul style="list-style-type: none"> ・分記法と3分法による記帳方法の違いが理解できた。 ・収益や費用は次期に繰り越せないことを理解できた。 ・商品に関する決算整理仕訳の必要性とその方法が理解できた。

新学習指導要領における育成を目指す資質・能力を評価するための視点	
①知識及び技術	<ul style="list-style-type: none"> ・3分法の仕訳を理解している。 ・決算整理の意味を理解している。 ・商品に関する決算整理仕訳の必要性とその方法を理解している。
②思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・3分法と分記法の特徴を踏まえ、決算整理の手法を適切に判断できる。
③学びに向かう力、人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・グループにおいて積極的に発言することができる。 ・決算振替仕訳の必要性に気付き、その結果が損益計算書の金額になることを突き止めることができる。